



CONTENTS

活動報告 SUAC Report

ビチャラ会	池上重弘／副学長	2
英語・中国語教育センター	横田秀樹／英語・中国語教育センター長	3
ラトビア文化ウィークス	天内大樹／デザイン学科	4
ラッパの変態	奥中康人／芸術文化学科	5
「浜松 楽器の事典」3カ年の経緯	文化・芸術研究センター	6
第8回静岡国際オペラコンクール	実行委員会事務局	7
2016年度研究事業等一覧		8
インフォメーション		12

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター

静岡県浜松市中区中央2丁目1-1 〒430-8533

●Tel:053-457-6105 ●Fax:053-457-6123 ●http://www.suac.ac.jp/

A r t s & C u l t u r e



文化・芸術研究センター長

峯 郁郎

Ikuro Mine

新たなフェーズ(段階)に入る 文化・芸術研究センター

本年4月より、文化・芸術研究センター長を務めることになりました。このニュースレターVol.20の巻頭で前々センター長の高田理事が「本センターは開学以来、静岡文化芸術大学における独自の研究活動を担い、かつ文化芸術の領域における地域の交流拠点となるべく様々な事業を展開してきました。それらは地域の人々や地元産業界から一定の評価を得るとともに、大学の知名度や存在感の向上に大きな役割を果たしてきたものと考えます…」と記され、当時情報発信機能の強化ということで3つの提案がありました。更に前センター長の池上副学長がそのメッセージを受けつつ、センターの「見える化」に尽力されて来た経緯があります。

ご承知の方も多いと思いますが、今年度はセンター所属の専任教員をお迎えするという新たなフェーズに突入しています。これまでの研究、教育、地域連携などの活動に、文明観光学と匠（伝統建築）という新たな研究分野が加わることで、本学の特徴である文化政策学部とデザイン学部とのコラボレーションに更なる独自性が重なり、研究・教育活動の拡大にともなった期待感の増大も想定されます。

文明観光学コースの設置にあたり、新たに専任教員として7月1日に着任された青木健先生は古代イラン学、イスラーム思想研究が専門で、主に西アジア、中央アジアにおける文明や宗教のご研究を通して歴史的な人の動きにも着目されています。信じるものや新たな価値を求めて人々が移動し、出会いや発見を重ね、交流しながら新たな世界を輝かせていく…このアクティビティこそが「くにの光を観る」、すなわち本学が言う文明観光の起源なのかも知れません。

続いて匠領域（伝統建築）の設置にあたり、専任教員として9月1日に着任された新妻淳子先生は伝統的な日本建築の調査、保存、修理、素材、意匠等の研究者で、富士宮市在住ということで静岡県内の伝統建築技術者との幅広いネットワークも所持

ちです。先生がおっしゃるように、伝統建築はさまざまな要素の複合体で、和釘1本から構造物はもとより、空間の構成、住まい方、人との関わり、機能面、意匠面における各要素が複合的に最適化された人工物です。また直にモノに触れて学ぶことの大切さを強調されていますが、この「直にモノに触れて学ぶ」ことの大切さは本学デザイン学部内で開学以来共有されてきた重要な価値観であり、基本的な姿勢と言えます。

世の中のモノやコトはすべてデザインされていると言って過言ではないと思います。文化政策学部で研究されているさまざまな事象、国際文化学科では異文化への理解と国際的なコミュニケーション能力を持つ人材育成、文化政策学科では新たな人間と社会のあり方を政策・経営・情報の視点から探求できる人材の育成、更に芸術文化学科ではさまざまなアートシーンの理解と芸術の持つ力を現代社会で活かす人材の育成を目指しています。またデザイン学部デザイン学科を構成している次の5つ、フィロソフィー領域ではデザインの基本を芸術的な感性をベースに、歴史・文化・科学の知識と共に探求、プロダクト領域ではモノとコトとが織りなす新しい価値を通して心豊かな暮らしの探求、ビジュアル・サウンド領域では時代のニーズに敏感で、情報技術とデザインとを融合させた独創的な価値を創出できる人材の育成、建築・環境領域では何よりも地球環境に配慮したサステナブルな生活空間の創造、インタラクション領域では人とモノ、モノと環境、それらの相互の関係を体験的に考察し創造する人材育成を目指しています。言うまでもなくこれらの研究、教育活動は新しい社会の仕組みの中で国際的な感覚と地球規模の持続性を意識した新しい価値の創出と提案、実現に向かってアイデアを展開できる人材を言えば「デザイン」していることに他なりません。これら両学部の取組みと新たなフェーズで始まる文明観光、伝統建築への取組みを学部を越えてハーモナイズさせることがセンターの新たなミッションであると考えます。

昨年度よりセンターの見える化が少しずつ具体化されてきており、この大学が20年近く創り出してきたモノ・コトのアーカイブ化はもとより、静岡県が歴史的に創り出してきた匠の技、更には広く日本の中で育まれてきたモノやコトの実例を目に見える形で展示、共有できるような企画も検討中で、20歳（私たち）を迎える本学の次の10年、20年を見据えた取組みも検討中です。

広い意味で優れたデザインは時代に即した最適な「あたりまえ」を人々にもたらします。更に常に現状に甘んじない問題意識、向上心と行動力が新しいあたりまえを創造します。今年度新たな研究分野に新たな専任教員をお迎えし、両学部の協業がもたらす相乗効果にテンションとハーモニーを生み出し、将来に亘って貢献出来るセンターを目指したいと考えています。

2016年度のビチャラ会 シーズン1~3

池上 重弘 (副学長)

『文化と芸術』Vol.24で横山俊夫学長が「ビチャラ会の夢」と題した巻頭言を寄せてくださったので、ビチャラ会という名称はかなり広く知られるようになった（と思う）。2016年度に文化・芸術研究センター長としてビチャラ会の企画と運営を担った者として、初年度のビチャラ会を振り返りたい。

教員によるこれまでの研究成果の報告ではなく、未来志向のアイデアをめぐる自由な談話の機会として、どのような名称がふさわしいだろうか——。学長と相談する中で思い浮かんだのがビチャラ会だった。「ビチャラ (bicara)」とはインドネシア語で「話す、おしゃべりする」を意味する動詞である。横山学長はお若い頃インドネシアのジャバに滞在されたことがある。また、私も元来はインドネシアの研究者だ。ビチャラというインドネシア語を使うことで堅苦しさが和らぐような気がして、未来志向の対話の場をビチャラ会と名付けることにした。

2016年度のビチャラ会は6月下旬から8月上旬にかけてのシーズン1、11月上旬から12月中旬にかけてのシーズン2、そして2月のシーズン3の3つの時期に行われた。毎回の参加者は多い時で30数名、少ない時でも20名ほどであり、教員のみならず、職員や学生、学外者の参加も少なからずあった。

シーズン1と2は自由創造工房を会場として平日の夕方18時10分から90分間行われた。教職員（一部、学生や学外者）が20分間話題提供し、その後20分間ビチャラ（意見交換）するセッションを2回行う形で運営した。以下、話題提供者を紹介したい（職位名等は当時のもの）。

シーズン1第1回は高山靖子教授と横山俊夫学長、第2回は天内大樹講師と高島知佐子准教授、第3回は加藤裕治准教授と伊豆裕一教授、第4回は井出直樹主幹兼係長（情報室）と宮田圭介教授が話題を提供した。なるべく両学部から1名ずつ話題提供者を迎えるようにし、参加者がどちらの学部にも偏らないように留意した。また、シーズン1では事務局からも井出主幹兼係長に話題提供をお願いし、ビチャラ会が教員だけの会でないことをアピールした。

シーズン2第1回は下澤嶽教授と鈴木基生氏（学外）／彌田徹氏（学外）、第2回は竹内康記室長代理（企画室）と峯郁郎教授／河口哲也氏（学外）、第3回は「SUAC映画祭」企画チーム（学生）と鈴木元子教授、第4回は「デザイン思考」優秀チーム（学生）と佐藤聖徳教授に話題提供をお願いした。事務職員に加え、学外者や学生チームの報告が加わった点がシーズン2の特徴である。とくに「SUAC映画祭」企画チームは、シーズン1第2回のアフタービチャラ（ビチャラ会のあと会場を移して飲食しながらの談話）で浮かんだ映画祭のアイデアをもとにしており、ビチャラ会に関連したアイデアが形に

なって提案されたものである。

2月のシーズン3は、「夜だと参加できない」という声に配慮し、昼休みに小講義室で実施した。時間が短いため話題提供者は1名のみ、時間は全体で40分に収めるようにした。シーズン3第1回は宮野哲主幹（地域連携室）、第2回は「浜松若者社中」を代表して藤井航平君（学生）が話題提供を担当した。短い時間ながら、夜間だと参加しにくい女性職員の参加もあり、「昼ビチャラ」には「昼ビチャラ」の効果があることを確認できた。

提供された話題はじつに多岐にわたり、それをめぐるビチャラ（意見交換）も刺激に満ちていた。以下に各回のキーワードをいくつか挙げてみよう。シーズン1ではDesign+Culture、天竜水系の文化資源開発のための共同研究、デザインミュージアムの可能性、デザイン・文化政策を結ぶ医療・福祉領域の研究、SUACバーチャル・アーカイブ構想、文化・芸術系デザイン教育創造プラン、SUACリサーチパーク構想、「発達障害」という概念をめぐる研究の可能性などが印象的だった。シーズン2ではグローバル人材センター、ゆりの木通りへの学外拠点設置、これからの大学広報について必要なこと、TEDxHamamatsu in SUACは新しい「名所」となるか、映画を通じた異文化理解、留学支援制度のあり方、「デザイン思考」による青空教室、奈良・京都古美術見学研修旅行等が記憶に残っている。そしてシーズン3では“ゆるいつながり”とStay in touch、浜松若者会議といったキーワードを拾うことができる。

ビチャラ会は2017年度に峯郁郎教授が文化・芸術研究センター長に就任してからも続いており、今後も本学における開かれた「アイデア出し」の機会として発展してゆけよう。



シーズン1第3回の様子（2016年7月20日）

活動報告 SUAC Report

英語・中国語教育センターの
これまでとこれから

横田 秀樹 (国際文化学科 英語・中国語教育センター長)

一説によると、子どもは母語の単語を1日平均9.7語のペースで覚え、主要な文法を4～5歳までにほぼ身につけるそうである。まだ靴紐も結べない子どもが、複雑な言語の操作をやっているようになることは驚くべきことである。一方で、外国語を身につけるのに、かなりの困難を伴うことは、経験上私たちはよくわかっている。母語はほぼ誰でも身につけられるのに、外国語をマスターできる人は少ない。このような母語習得と外国語習得の差は、乗り越えることができないものなのだろうか。外国語習得研究において指摘されている重要なポイントがある。一つは、「大量の外国語のインプットを浴びること（聞いたり、読んだりすること）」であり、もう一つは、その「外国語を実際に使うこと」である。そして、それらの言語活動に共通して重要なことは、「ことばと意味（概念）を同時にマッピングする（対応づける）こと」である。子どもが母語で当たり前のように行っているこのシンプルなことが、実は一般的な外国語の授業内ではほとんど行われていない。

このような外国語にどっぷり浸かる環境を日本国内にいても与えられるように、英語・中国語教育センター（以降、英中センター）は平成25年4月に設置され、現在、英語特任講師（3名）、中国語特任講師（1名）が配置されている。これまで、英中センターは2つの柱を中心に英語と中国語教育の改革を進めてきた。1つ目の柱は、上述した環境づくりである。ウィークリーイベントとして、英語ランチ、映画鑑賞、Book Club、中国語コーナーなど、マンスリーイベントとして、毎月浜松に在住の外国籍の方を招待し、キャンパスで自国や文化について講演を行って頂いているインターナショナル・コミュニティ・フォーラム（ICF）、特別イベントとして、英語模擬国連、トルコのイズミール大学の学生と本学生が協力して行うデザイン・ゲート、中国語スピーチコンテスト、TOEIC、IELTS、HSK試験対策など、数多くのイベントやプログラムを実施することで、学部、学科に関係なく誰でも日常的に英語・中国語を実際に「使える」環境を提供してきた。

2つ目の柱として、語学授業の充実を目指し、平成28年度から英語コミュニケーション、中国語コミュニケーションの授業数を増やし必修8単位とし、1、2時限目に集中させる時間割編成をとった。それによって、英語、中国語以外の外国語を、国際文化学科の学生だけでなく全学部生が履修可能のように配置し、さらに外国の多様な文化や芸術についての講義、日本語・日本文化に関する教育と合わせて、双方向的なグローバル教育の充実を図ってきた。さらに、留学相談、海外企業への就

職支援も行ってきた。そして、それぞれについて毎年、成果検証を行い、積極的にイベント、プログラムの改変、授業内容の改善を行っており、結果的に、期待通りの成果をあげてきた。

このような英中センターも発足から5年を迎えようとしている現在、「これから」を考え、以下のような3つの変革を目指している。一つは、「地域連携」を充実させること、もう一つは「国際交流」の機能を強化すること、さらに、英語、中国語を中心としながらも、「多言語教育」を充実させることの3点である。「地域連携」として、例えば、当初学内向けであったICFを、浜松市を中心とする一般市民の方々にも順次公開し、静岡県内の中学生や高校生との連携活動などを導入しつつある。「国際交流」に関しては、留学担当の特任講師を採用するなど、海外への派遣留学生をさらに手厚く支援し、海外留学者数を増やすと同時に、本学の受入れ留学生への支援も充実させる予定である。そして、多言語教育に関しては、英語、中国語を中心としながらも、フランス語・ドイツ語・イタリア語・韓国語・ポルトガル語・インドネシア語など複数の外国語を効果的に身につけるカリキュラム編成をし、受入れ留学生との交流等を考慮しながら、語学教育、英中センター・イベントを拡充する予定である。また、デザイン学部の観点からも、北欧、イタリア、フランス、ドイツなどはデザイン先進国であり、グローバル化推進のための対象地域としての重要性が高まると予想されることや、アジア圏の国々との交流の必要性もこれまで以上に増し、ますます英中センターの役割が重要になるはずである。



公開講座・企画展「ラトビア文化ウィークス」

天内 大樹 (デザイン学科)

本講座はもともと、駐日ラトビア共和国大使館が主催する建築パネル展「ラトビア、融合の建築」が東京工業大学、京都工芸繊維大学を経て浜松に巡回する（後に宮城大学へ巡回）のを、本学西ギャラリーで引き受けるという「イベント・シンポジウム開催費」枠内の企画であった。これに学生制作によるラトビア料理のパーティと文化紹介パネルを独自企画として組み合わせたが、「公開講座」枠に格上げされるに伴い、事務局の費用・業務負担と引き替えに複数回のレクチャを準備し、企画者たる天内もリガを訪れることになったというのが「ラトビア文化ウィークス」の成立経緯である。学内外とも、ラトビアに多少なりとも見識のある日本語話者を探すのが第一のハードルであった。

この建築パネル展は、ラトビア共和国駐日大使夫人ダツツェ・ペンケ氏が、建築家・キュレーターのイルゼ・バクローネ氏や日本の新建築社と共同で組んだ、同社刊行『a+u』誌ラトビア建築特集（555号、2016年12月）の内容を、国内巡回展として発展させたものである。誌上では中世・近代建築を3割、現代建築を7割程度の配分で、リガ新市街、旧市街、近年開発が進行中のダウガヴァ川西岸、リガ市外という順に紹介していた。本展示はこれを10テーマに再編集し、1テーマに写真パネル4枚を掲げたゲートを観衆が経巡るよう設置した。ただし地方巡回セットに含まれたのは9テーマであった。このゲートの設置・搬出日程と作業人員、また開催場所・日程の確保が第二のハードルであった。直後西ギャラリーで開催された「フォトグラフィックス」授業作品展には、確保済みだった日程を一部いただいた。おかげさまで展示期間を、当初の1週間から大使館側の希望通り6月9～23日の2週間に拡大できた。

パネル展という展示形式は、三次元かつ人体を囲い込む規模で建築が提供すべき空間体験を、二次元の写真という鑑賞対象に集約し、写真構成によって観者の理解を概念に誘導するという、それ自体難易度の高いものである。ましてラトビアというまだまだ理解が必要な国が対象であるため、ラトビア文化一般を紹介するパネルを導入するのは必須と考えられた。デザインと国際文化という本学独特の同居を示せるよう、両学部生の協働をめざした。この人員を得るのが第三のハードルだったが、結果的にデザイン学科ゼミ生から人づてに知り合いの国際文化学科生を募ったため、うまく協働するチームになった。

6月9日金曜には学内公開の形で、ダツツェ&ノルマンス・ペンケ大使夫妻を迎えて学内サークルSUAC Kitchen制作によるパーティを行った。SUAC Kitchen、とくに代表の紅林美咲さんには限られた予算の中でレシピを工夫していただき、なおかつメンバーには試作・試食などで文字通り身体を張ったご協力をいただいた。甘酸っぱい、というよりは複雑な味の異文化体験となったことだろう。

6月16日金曜にはラトビアに行ったことのある3名の教員に、非常に散漫な企画ながら写真を見せてトークをお願いすることになった。企画者には公開講座への参加自体が初めてだったので、受講者層への企画意図の伝え方などを読み間違えたか

もしれない。学生や教職員の存在を実状よりも強く想定していたからである。パネル制作学生も席上で、その内容を短く発表した。普段学生とコミュニケーションがほぼないと思われる世代・職業の人びとに自身の考えを伝えるという異文化体験になった。後日のアンケート評価は必ずしもすべてに好意的ではなかったが、それも企画の緩さを理解いただく努力が足りなかったからであろう。

6月17日土曜にはきちんとしたシンポジウムを開催した。岩手大学人文社会科学部でラトビア語学を専門となさる堀口大樹准教授には、とくに合唱と生活文化や国民意識との関係のお話をお願いしていたが、自身のラトビア語詩朗読や、同国で5年に1度開かれる「歌と踊りの祭典」の映像などで生き生きとしたご講演となった。また神戸のラトビア雑貨専門店「SUBARU」の溝口明子氏には、伝統工芸が現代生活に息づいているさまをお話いただき、ラトビア地域の概説として広範な内容となった。浜松周辺のとくに女性が雑貨店などを起業する関心から聞いていただけたかという企ては心許なかった。また天内も首都リガが発展した時代と建築との関係を三期に分けて整理しながら、人口減と空家率の上昇に突進する日本にとっての先駆者として、ラトビアの近年の体験に学ぶ必要性を訴えた。未来の手がかりを得たいというメッセージだったが、前向きに響かなかったかもしれない。いずれも企画が的外れだったろうか。

ラトビアという対象自体、私たちが選んだというよりは降って湧いたものではあったが、そもそも出会いは半分以上受動的な運命である。次の機会には、企画内容・形式において私たちの出会いをよりよく表現することで、さらなる人びとに出会い、感じ、創造してほしいと願う。



活動報告 SUAC Report

ラッパの変態

～ヨーロッパの楽器が日本の民俗音楽になることについて

奥中 康人 (芸術文化学科)

三味線は、日本を代表する絃楽器だが、実は大陸から（琉球経由で）やってきた外来楽器である。ただし、近世の人々は、楽器の形状や演奏法を自由にカスタマイズすることで、自分たちの好みに引き寄せた。そうした変容の結果、三味線は江戸時代の音楽文化の主役となり、現在では「私たちの伝統」と認識されるようになった。これは三味線だけのレアな事例ではなく、世界各地の音楽についても同様である。外から入ってきた音楽や楽器は、その土地の環境にあわせて姿を変えて、定着する。

さて、日本に西洋音楽が入ってきたのは（ザビエルの頃はさておき）幕末以降。まずは軍隊用のラッパがやってきた。しかし、奇妙なことに、これまでの音楽史の叙述は、幕末日本にラッパが入ってきたことには関心を示すのだが、その後の日本でどのように変容したのかについては、全く関心を示さない。なぜなら、日本における西洋音楽は「西洋と同じ」であることを大前提としてきたからである。

つまり、まず幕末に「西洋と同じ」ラッパがやってきた。明治になって「西洋と同じ」 brassバンドが、昭和になって「西洋と同じ」オーケストラが編成され、「西洋と同じ」名曲が演奏され、「西洋と同じ」コンクールも開催できるようになった……と。「西洋と同じ」を達成することこそが最重要で、その土地の状況に応じたローカルな変容などは、まるで価値がないという訳である。ああ、くだらない。

明治期に軍隊で採用されたラッパは、明治の後半になると全国各地の消防組にも配備された。ラッパといえば軍隊を連想するかもしれない。しかし、その普及の広がりや、人々の生活との近さという点では、どんな僻地にも必ずあった消防組は見逃せない。しかも、変容はこの消防組から始まった。それは、江戸時代の火消しに由来する消防組の若衆たちが、村のお祭りのスタッフを兼ねていたことに起因する。消防訓練のために吹奏されたラッパは、祭礼にも転用された。当初は、祭礼を警備する側として、秩序を乱す者を制するための音を、しかし、ときには秩序を乱す若者たちを囁かすためにも。

そう、あの「浜松まつり」のラッパは、こうした文化変容の一例である（近年、複数の浜松の郷土史家は、「浜松まつり」のラッパの起源が消防ラッパであると主張しているが、私も同意である）。今では、自己流にカスタマイズしたラッパも出現し、すっかり「民俗楽器」として定着している。しかし、「西洋と同じ」でなければ気が済まない人々には、面白くないのか、あからさまに侮蔑する人もいる。

似たような展開をみせたのは長野県である。本学紀要（第17巻）に掲載した拙論「長野県における消防ラッパの普及と変容」は、筆者が長野県内の複数の図書館に何度も通い（浜松

～長野県は、近くて遠い！）、消防とラッパに関する資料を収集・分析することで得られた研究成果の一部である。

長野県の消防組でも、明治・大正期にラッパが配備され、諏訪地方では遅くとも1932年までに諏訪大社の御柱祭と結びついたようだ。戦後になって、消防団では、複数のラッパ手による「ラッパ隊」アンサンブルが盛んになり、1983年からは「長野県消防ラッパ吹奏大会」というラッパのコンクールが開催されている。この大会は、地区予選を勝ち抜いた選りすぐりのラッパ隊（十数名のラッパ手と数名の打楽器奏者）が、与えられた8分の間に課題曲と自由曲を演奏して、優劣を競う。シンプルで構造ゆえに、ラッパは音程の調節が難しいにもかかわらず、各ラッパ隊のメロディラインは一条乱れることなく、ハーモニーもきれいに響かせる。消防のラッパ吹奏大会が盛んになるに伴い、諏訪の御柱祭のラッパも充実してきた。勇壮な木落としは、いつもニュース映像で紹介されるが、その直前に行われているセレモニーで、地域の氏子たちで編成されたラッパ隊が〈アルペン・ファンファーレ〉（消防ラッパの定番曲）を吹いていることは、ほとんど知られていないだろう。

日本のラッパ文化は、軍隊～消防～祭礼と、吹奏の場を移すことで、それに相応しい「態」を獲得してきた。それは100年以上にわたる緩やかな「変態」の歴史でもあるのだが、近年になって新たなフェーズに突入したと、私はみている。

一昔前なら、消防やお祭りの世界と「クラシック音楽」の世界に、ほとんど接点はなかった。しかし、最近では brassバンドやオーケストラで金管楽器を演奏した経験のある人々が、ラッパを手に消防やお祭りに参加することが珍しくない。浜松でも諏訪でも、従来の消防・祭礼ラッパに飽き足らないミュージシャンたちが先頭に立ち、トランペットで獲得したテクニックをフルに活用して——しかし、決して「ラッパ」を手放すことなく——、新たな表現・レパートリーを開拓している（浜松のジャズ風セッションや諏訪の〈ルパン〉は必聴！）。

実用音楽から娯楽音楽への移行期にあるラッパ文化は、直輸入的な舶来文化が正統で高級であると信奉する人々の眼には邪道で低級な音楽としか映らないだろう。だが、きちんと歴史を振りかえれば、いつの時代も、先行する文化の変容・変態が次の時代の主役になってきたことは、明らかだ。

※本稿に関連したレクチャーとラッパの実演イベント「ラッパの変態」（仮称）を12月9日（土）に静岡文化芸術大学・自由創造工房にて開催します。（本紙P.12インフォメーション参照）

文化芸術セミナー「浜松 楽器の事典」3カ年の経緯 ～「楽器産業文化」の研究と継承～

文化・芸術研究センター

■開催まで

昨年度まで3カ年に渡り開催された「浜松 楽器の事典」には2つの「源流」が存在する。特別研究プロジェクト「ピアノ製造アーカイブ研究」(2011～2013) 及び「バンバン! ケンバン! はままつ (2012)」(本イベント自体は2012～2015) である。

「ピアノ製造アーカイブ研究」は浜松地域に在る中小のピアノ製造業者にフォーカスし、企業・工房の沿革、生産技術やブランド及び製品特性などをアーカイブとして整理しようというものであったが、予備調査の結果、既に浜松地域の中小ピアノ製造業者のほとんどが姿を消しており、アーカイブとしての取りまとめは困難となっていた。研究は軌道修正を余儀なくされ、浜松のピアノ製造を産業史として概観し、その中で多くの中小業者が起り、やがて衰退していった経緯を明らかにすることとした。本研究については本学『研究紀要VOL.14』に研究報告(富田著)を掲載しているが、研究の中で、21世紀の今日尚、世界一の楽器産業集積都市である浜松のユニークな様相を再認識することができた。

2012年10月に開催された「バンバン! ケンバン! はままつ」は楽器産業集積都市浜松を「キーボードの街」と再定義し、ピアノをはじめとする様々な鍵盤楽器(オルガン、鍵盤ハーモニカ、電子楽器etc.)を生み出してきた当地で開催する「鍵盤楽器の音楽祭」である。中でも注目されたのは浜松の楽器メーカーにおいて楽器の開発に直接携わった技術者たちによる講演、シンポジウムであった。楽器製造業の集積とは同時に楽器製造に携わる技術者、デザイナーの集積であり、それこそ世界的に見てもユニークかつクリエイティブな浜松の姿といえる。

以上の研究プロジェクト、イベントプログラムを通して明らかになった浜松の姿をより具体的にとりあげ、学内外にアピールする新たな形を模索する中で企画されたのが文化芸術セミナー「浜松 楽器の事典」である。楽器製造業の集積は周知の事実ながら、その事実が持つ意味と可能性を幅広く伝えることで他の都市では決して開催できない、浜松独自の音楽文化イベントを発信することが可能であると考えた。

■2014年度「ピアノ編」

ピアノ産業史研究の成果を伝える場、という点から、「浜松 楽器の事典」が「ピアノ編」から始められるのは極めて自然なことである。ピアノに関わる4つのテーマを設定し、前半はそれぞれの分野の有識者によるレクチャー(楽器トーク)、後半はピアノ独奏による「ピアノ音楽の歴史」(名曲ライブラリー)という構成とした。名曲ライブラリーは全5回すべての楽曲演奏を浜松在住のピアニスト・石井園子さんをお願いした。

①「浜松のピアノ産業」(2014.6.5) 講師：四方田雅史(文化政策学部准教授)／産業発展のプロセスと産業集積について及び浜松のピアノ産業史研究の成果報告。

②「ピアノを作るⅠ」(2014.7.11) 講師：峯郁郎(デザイン学部教授)／ピアノ製造の歴史的発展とピアノの基礎知識

について。

③「ピアノを作るⅡ」(2014.10.17) 講師：峯郁郎／ピアノ製造工程、様々なデザインのピアノを紹介。

④「ピアノ調律と調律師」(2014.11.4) 講師：杉本重夫(ヤマハ調律師)／ピアノに欠かせない調律の世界(調律、整調、整音etc.)を解説。

⑤「楽器産業と創造都市」(2014.12.17) 講師：根本敏行(文化政策学部教授)／浜松における楽器産業の発展、世界と浜松の楽器工房、世界の楽器産業をリードする浜松の創造都市としての可能性について。

■2015年度「ピアノ特別編 音楽コンクールと音楽文化」

(2015.11.13)

第9回浜松国際ピアノコンクールの開幕直前、平野昭(音楽学・本学名誉教授)、小岩信治(音楽学・一橋大学)、上野優子(ピアニスト)の3氏を招聘。前半は上野優子さんのピアノ演奏、後半は3人のトークセッション。音楽コンクールについて出場者、審査員それぞれの立場からの話題提供、さらに国際コンクールの文化史と政治史、膨大な課題曲準備の負荷と意義、演奏者はコンクール後もレパートリーを広げ、腕を磨くための勉強時間が必要、などコンクールに関わる多彩な話題が提示された。

■2016年度「トランペット編」

(①2016.11.24 ②2016.12.8)

金管楽器の花形、トランペットの世界を2回に亘り紹介。世界的トップメーカーであるヤマハ㈱にご協力を頂き、トランペット製作の第一線で活躍する開発技術者(松隈義彦氏、福田徳久氏)からトランペットの歴史と楽器の原理、さらに良質な楽器を創造する研究開発に関わる話題を紹介、後半は日本のトッププレイヤー、NHK交響楽団首席奏者・菊本和昭氏のコンサート。菊本氏は様々なトランペットを巧みに使い分け、トランペット演奏の多彩な世界を表現した。

■楽器産業集積都市研究と産業文化の継承

「浜松 楽器の事典」は浜松と楽器産業との関わり、浜松の楽器産業の特色、楽器産業が浜松にもたらした文化的遺産、楽器産業の集積から生まれ育った「音楽の街」の可能性、世界で愛用されるメイドイン浜松の様々な楽器、などをテーマとしたレクチャーやトークセッションを、楽器が奏でる上質な音楽とともにお届けする「セミナー・シリーズ」であった。楽器と音楽文化との関係性は多様であるが、楽器産業の集積は単なる産業集積に留まらない。楽器を作り出す技術者、デザイナーの集積が、ユーザーであるアーティストや愛好家との「楽器・音楽を廻るコミュニケーション」の場へと繋がり、「楽器の街」は世界に類のない音楽文化・産業文化の都市となる可能性を孕む。それは音楽創造都市・浜松の今後の在り方へと繋がるものでもあろう。このセミナー・シリーズの成果が音楽創造都市の一端へと導く鍵になればと切に願うものである。

(文責 富田晋司／地域連携室)

活動報告 SUAC Report

第8回静岡国際オペラコンクール

静岡国際オペラコンクール実行委員会事務局

1 3年に1回の「マウント・フジ・オペラ」

世界トップクラスの若手オペラ歌手がその実力を競い合う第8回静岡国際オペラコンクールが11月にアクトシティ浜松で開催されます。このコンクールは、静岡県ゆかりのオペラ歌手三浦環をたたえ、没後50年にあたる1996年から3年ごとに開催されています。8回目となる今回から、コンクールの愛称として「マウント・フジ・オペラ」を採用し、知名度の向上を図っています。

1月に参加者の募集を開始したところ、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ、オーストラリアなど世界の22の国と地域から191名の応募があり、予備審査で参加を承認された応募者のうち参加手続きを完了した9ヶ国65名が浜松で行われる第1次予選へ出場する予定です。

コンクール初日から3日間にわたって行われる第1次予選では、自らが得意とするアリアを2曲歌います。バロックから近・現代に至る名アリアの数々を一度に鑑賞することができるので、オペラファンの方はもちろん、オペラが初めてという方にも楽しんでいただけます。

続く第2次予選では、出場者がオペラの一役を選び、審査委員から指定された場面を歌い演じます。これは世界の音楽コンクールの中でも数少ない審査方法で、出場者の発声技術や表現力はもとより、オペラ歌手としての経験も問われる難度の高い課題です。

そして本選まで進んだファイナリストは、オーケストラ・ピットでのオーケストラ伴奏のもと、4階まで広がる大ホールの観客に向け、2曲のアリアを歌い上げます。オペラの上演状況に近いこの形態の審査では、世界の歌劇場で通用する声の響きや音量が必要とされます。



第7回コンクール
第1位 鴨原奈美さん

2 運営には文芸大生も参加

このコンクールでは静岡文化芸術大学の学生が様々な役割を果たしています。

まず、コンクールを広報するためのポスターは、デザイン学部4年の今野滉平さんのデザインによるものです。このデザインは、ポスターのほかにも、アクトシティ浜松の壁面広告や

ラッピングバス、音楽雑誌の広告など様々なメディアに展開されています。

また、本学学生の同好会で、フェアトレードの普及活動を行っている「りとるあーす」が「マウント・フジ・オペラ」にちなんだ富士山型のお菓子を会場で販売し、コンクールを盛り上げます。

静岡国際オペラコンクール
デザイン制作プロジェクト表彰式



自作ポスターと並ぶ今野さん

さらには、約20名の学生がボランティアとして会場で活動する予定です。このように文芸大生がコンクールの一端を担っています。



お菓子の試作品の検討

3 盛況の開催記念コンサート

8月26日と9月16日の2日間にわたり、新東名高速道路NEOPASA浜松で開催記念コンサートが行われました。

このコンサートは、県内外へコンクールを広報するため行われたもので、コンクールの特別協賛企業であるローランド株式会社、ヤマハ株式会社との協力のもと、県内のオペラ団体の会員が出演しました。



アリアを披露する歌手

当日は、県内外から訪れた多くの利用者が、ドライブ休憩のひと時にオペラアリアの美しい響きに耳を傾けていました。

4 芸術の秋はオペラ鑑賞を

静岡国際オペラコンクールは、世界トップクラスの若手歌手の演奏を浜松で聴くことのできる絶好の機会です。あなたも浜松から世界へ羽ばたく新たなスター誕生の瞬間に立ち会ってみませんか。11月はアクトシティ浜松でオペラ三昧の日々を！

第1次 予選	11月11日 ^土 12日 ^日 13日 ^月 13:00 開場 13:30 開演	一般自由 500円 学生自由 無料	本 選 表彰式	11月19日 ^日 12:45 開場 13:30 開演	一般指定1階 3,000円 一般自由3・4階 1,500円 学生自由3・4階 500円 ※表彰式は入場無料
	11月15日 ^水 16日 ^木 13:00 開場 13:30 開演	一般自由 1,000円 学生自由 無料		指揮 高橋 直史 オーケストラ 東京交響楽団	
[通し券] 一般(予選自由席・本選指定席) 5,000円 ※公式プログラム付き					

チケット好評販売中

チケットぴあ pia.jp/t
0570-02-9999

第1次予選・第2次予選・本選
Pコード 326-811

通し券
Pコード 782-563

※学生は大学生以下 未就学児入場不可

2016年度 研究事業等一覧

〈特別研究〉

No.	研 究 名	代表者		目 的 及 び 内 容
		学科	氏名	
1	静岡文化芸術大学を核とした多文化共生の推進策をめぐる研究	国際文化	池上 重弘	第2期中期計画に記載された「多文化共生の推進」を実現するため、定住外国人学生の実態把握に向けた基礎的研究を行うと共に、本学が多文化共生分野で地域貢献する上での今後の展開を見据えた実践的研究を推進する。
2	子どもの足跡設置とプロジェクトの総括	国際文化	武田 好	現代美術家ホセイン・ゴルバの「子どもの足跡プロジェクト」により採取した足跡のテラコッタ板を本学創造の丘に設置。アーティストによるレクチャーと子どもたちとの交流会を開催、プロジェクトの意義を総括する。
3	カトヴィツェ市（ポーランド）の文化政策の新展開	文化政策	根本 敏行	製造業中心の工業都市から、文化芸術を柱とする創造都市政策に転換して目覚ましい成果を挙げているカトヴィツェについて、ユネスコ創造都市ネットワーク（音楽）加盟等の都市政策について経緯や成果、課題を調査する。
4	浜松市の中山間地域における空き屋の文化資源的価値についての研究：浜松市天竜区を事例として	文化政策	船戸 修一	本学の学生（船戸ゼミやサークル「LA-Voc」）と地元住民と連携を図りつつ、浜松の中山間地域における空き家など地域資源を活かした、農山村集落の維持あるいは再生の方策を構想する。
5	SUACの研究活動15年の成果	芸術文化	高田 和文	2015年に開学15周年を迎えた本学の研究活動の成果を総括し、報告書の形で刊行する。報告書は、3つの重点目標研究領域を中心としながら、その他全ての研究活動、イベント・シンポジウム事業等を含めたものとする。
6	SUAC芸術経営統計の2時点比較にもとづく我が国の芸術文化団体の分析	芸術文化	片山 泰輔	平成25年度実施の我が国初の包括的な芸術経営統計調査の継続調査を実施し、2時点間の変化を分析するとともに、近年重要性が高まっているメディアアート施設を調査項目として独立させ、その実態把握の充実を図る。
7	五感で音楽を感じて楽しむアート・ツール・環境の開発	デザイン	谷川 憲司	子供、高齢者、聴覚・視覚などの特性の如何に関わらず、誰もが「音楽」と一緒に楽しめる体験、五感で感じて楽しむアート・ツール・環境を開発する。研究を通じて地域における産業・UDの新たな方向性探索を目指す。
8	SUAC発のUD価値創造に向けた3つの萌芽研究	デザイン	小浜 朋子	本学の文化とデザインの研究基盤を活かし、①認知・記憶しやすいメディアデザイン、②照明の変化を利用した絵画鑑賞、③デザイン素材の印象の多様性、3つのUD研究を立ち上げ、SUAC発の新しい価値を創造する。
9	浜松市天竜区水窪町における民間口承文化財（民話）の採録調査およびその公開と保存	国際文化	二本松康宏	浜松市天竜区水窪町において民間口承文化財（民話）を調査・採録し、その公開および保護・保存、そして伝承の継承を目的とする。行政、地域との連携による本学の地域貢献、地域振興事業の発信となることを目指す。
10	高大接続による高校教育・大学教育・大学入試の研究	国際文化	横田 秀樹	高大接続の観点から、大学入試及び英語教育のニーズ分析を行い、英語力（英語4技能）評価方法の在り方を検討するとともに、本学英語教育における英語力評価方法（ルーブリック評価）の開発を行う。
11	eBookを活用した授業の可能性を考える	文化政策	野村 卓志	本学でeBookを活用した授業を行なうために必要な環境整備や事前指導の必要性などを、実際にeBookを契約して検討する。
12	人口減少時代における地域のあり方を考える	文化政策	林 左和子	人口が減少し高齢化率が高まる時代における課題を、それぞれの教員が専門の視点から検討し、これからの社会の望ましいあり方を考える。
13	欧州における対外文化政策の現状と課題ーパリを中心にー	芸術文化	松本 茂章	対外文化政策の「十字路」である仏国パリを中心に、いかなる文化政策が行われているかの現状を把握し、課題の抽出を通じて、今後の対外文化政策を考える研究である。
14	「こころ」指向のメディアデザインによるウェルネス・エンタテインメントの研究	デザイン	長嶋 洋一	生体情報処理と内受容感覚バイオフィードバック研究とメディアデザインとの融合により、人間の「こころ」（意識・注意・情動）と結び付いた感情インタラクションによる「ウェルネス・エンタテインメント」を追求する。
15	国際デザインワークショップマネジメントの研究	デザイン	高山 靖子	デザイン教育の国際化を図るため、各デザイン系大学で取組まれ始めた国際ワークショップの事例を収集、分類し、得られる成果の違いや問題点やその解決方法などを明らかにし、そのマネジメント手法の構築を目指す。
16	デジタルファブリケーションの活用によるデザイン研究・開発	デザイン	服部 守悦	デジタルファブリケーション設備の活用による、新しいモノづくりに対応したデザイン研究・開発。本設備を地域における人材育成、および産業支援等に活用することによる地域貢献。
17	動物介在教育のための空間デザインに関する研究	デザイン	亀井 暁子	教育に動物が介在する「動物介在教育」の実践の場となる空間について、空間デザインの観点から研究を行うことを通じて、動物介在教育が意図する効果が発揮される空間デザインについての手法を考察する。
18	シンポジウム 第二回「国際化」の視座からの日本研究-本学&フィリピン大学&日本女子大学連携事業-新作能「ボニファチオ」の作能とマニラ公演	芸術文化	梅若 猶彦	1 能作者をシンポジウムに招き、能作に必要なプロトコルを明らかにしてゆく 2 新作能「ボニファチオ」をマニラにて公演する
19	学内情報環境の使いやすさの簡易評価手法の検討	デザイン	宮田 圭介	学内の情報環境はweb履修登録や講義室のAV機器、図書館の運用方法など使いにくいと指摘されることが多い。どうすれば使いやすい機器の導入や情報環境を提供できるのか、評価提案できる手法の検討を行う。
20	伝統工芸技法応用オーディオスピーカーの試作研究（仙台簞笥技法及び駿河漆器・蒔絵技法の応用化）	デザイン	永山 広樹	本試作研究は、仙台簞笥技法、駿河漆器・蒔絵技法等の漆工技法と指物技法等伝統工芸技法を日常生活への応用化を図る目的として、音楽再生用スピーカー試作開発研究を行う。

〈イベント・シンポジウム〉

No.	イベント名	代表者		実 施 内 容
		学科	氏名	
1	第3回 産学協同国際デザインワークショップ	デザイン	高山 靖子	実施期間：4月1日(金)～3月31日(金) 内 容：国際交流提携校であるイズミル経済大学の学生8名と教員1名を招き、本学のデザイン・文化政策両学部生との混成チームによるビジネス提案を行い、地域産業を代表とする企業4社からデザイナーを招き「観光＋スローモビリティ」をテーマに、ビジネスとそれに伴うデザイン提案を行い、ワークショップについての記録パンフレットを作成した。

No.	イベント名	代表者		実 施 内 容
		学科	氏名	
2	コース演習室スペースデザイン 学生ワークショップ	デザイン	磯村 克郎	ワークショップ運営は、5/13から夏休みまで毎週金曜日にリサーチ、デザイン検討を学生11名の参画を得て行い、夏休み中は、3グループに分かれて家具等の制作活動を行った。同時に、京都工芸繊維大学の製図室や研究室を見学し、教員側・学生側の様々な工夫や運営の実態を把握し、デザインを学ぶ環境づくりの一端になった。
3	静岡文化芸術大学 室内楽演奏会2016	芸術文化	梅田 英春	①「音楽の力 唄う 高石ともやトークコンサート」 日時：7月23日(土) 18:30~20:30 会場：静岡文化芸術大学 講堂 ②「バンドゥンからの音便り〜インドネシア・スダ地方の伝統音楽」 日時：10月22日(土) 15:00~18:00 会場：自由創造工房 内容：浜松市と文化・環境面において協定を結んでいるバンドゥン市の位置するインドネシアのスダ地方(西ジャワ)の伝統音楽を、季節と演奏により市民の方にお聞きいただくコンサートの開催。 ③「テルミンの世界 操られる音・紡ぎ出される音楽」 日時：12月10日(土) 13:30~15:30 会場：静岡文化芸術大学 音楽室 内容：世界初の電子楽器テルミンについて、日本におけるテルミン演奏の第一人者、竹内正実氏を招きレクチャーと演奏、テルミンについてのトーク。 ④「風と川と音と」(龍山に響くパイプオルガンコンサート) 日時：3月25日(土) 14:00~15:30 会場：龍山森林文化会館(浜松市天竜区) 内容：「風の音」「小鳥のさえずり」とも評される、暖かく自然な音が魅力である龍山森林文化会館に設置されているパイプオルガンが奏でる演奏会の開催。
4	第6回めばえの親子 じゅうどう教室	国際文化	溝口 紀子	日時：6月12日(日) 13:00~16:00 会場：浜松市武道館 主催：静岡文化芸術大学 共催：静岡県柔道協会西部支部 協賛：西部柔道連盟 内容：6回目の「めばえのじゅうどう教室」は、これまでどおり幼児を対象に「遊び」の要素をとり入れたバランス、調整力を促す柔道初心者への導入教育プログラムを展開、今回は、フランス柔道ナショナルチームコーチ、アミナ・アブデラティフ氏を特別講師に迎え、フランスの指導で技術指導を行った。
5	フェスタジュリーナ na SUAC 2016	国際文化	池上 重弘	日時：7月9日(土) 11:00~16:00 会場：学生食堂(雨天の為) 共催：日伯交流協会 後援：静岡県、浜松市、在浜松ブラジル総領事館、(公財)浜松国際交流協会 内容：フェスタ・ジュリーナは、ブラジルの伝統的なお祭りである「6月の祭り」(フェスタ・ジュリーナ)になぞられたもので、ブラジル風の飾り付けを施した会場で、参加者が伝統的な踊り「クワドリリーヤ」や「リボンダンス」を楽しむイベントで、当日は、昼までは大雨で客足も伸びなかったが、雨が上がった午後からは日本人、ブラジル人合わせて約200名の来場があり、本学学生と市民がブラジル文化に触れ交流が図れた。
6	「仮面ライダー展」 ワークショップ (教育普及活動)	芸術文化	立入 正之	日時：7月9日(土)~8月26日(金) 会場：浜松美術館・静岡文化芸術大学 共催：浜松市美術館、東映㈱ 内容：浜松市美術館で開催した「仮面ライダー・プレミアムアート展」の関連研究事業として、親と子のための「ワークショップ」を企画・運営した。浜松市美術館利用者の鑑賞サポート、美術館における教育普及活動充実、さらに本学との連携構築が目的であった。 本事業は、「本学特別研究」と「地域連携実践演習授業」から成る、合同プロジェクトの参加メンバーが主体となり企画から運営までを行い、展覧会や広報活動にも積極的に取り組み、展覧会担当学生によるギャラリートークも経験した。さらに、浜松市中心部と浜松市美術館周辺のアート散策地図をデザイン部学生が作成した。 また、ワークショップを2日間実施し、各日午前と午後2回ずつ開催し、子供30名、保護者30名ほか、総勢100名が参加した。
7	ユニバーサルデザイン 絵本コンクール2016及び世界の バリアフリー絵本展	文化政策	林 左和子	日時：(表彰式)11月12日(土) 14:00~15:00 (展示会)11月12日(土)~11月17日(木) 10:00~19:00 (作品募集)9月1日(木)~10月12日(水) 会場：ギャラリー 主催：静岡文化芸術大学 後援：静岡県、静岡県教育委員会ほか 内容：絵本の制作をとおして、ユニバーサルデザインへの理解を深め、同時に絵本の持つ可能性の追求を目的として、またUD絵本の存在を多くの人に知ってもらうためにコンクールを実施した。なお、表彰作品の展示会には、6日間で、150人を超す市民が見学に来学した。2月には浜松市役所のロビーなどを会場とした展示会を実施、1000名近くの来場があり、さらに3月大崎ゲートシティホールで開催された「子供の本の日フェステバル2017」で入賞作品を展示した際にも、125名ほどの来場者があった。
8	イタリア仮面劇の上演と ワークショップ	芸術文化	高田 和文	日時：12月2日(金) 18:30~20:30 12月3日(土) 14:00~18:00 会場：講堂(仮面劇上演) 体育館(ワークショップ) 主催：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター 内容：ボローニャの劇団によるイタリアの伝統的な仮面劇コンメディア・デッラルテ「ドン・ジョヴァンニーよみがえる石像の宴」の公演を本学講堂で実施。地域の市民にも無料で公開し、多くの来場者を集めた。仮面劇は、本学学生が舞台運営や会場整理などのほか、通訳や劇中アナウンスとしても舞台製作に協力した。翌日には、浜松のNPO法人と協力して本学・体育館において、本学の演劇サークル及び地域の劇団の俳優に向けたワークショップを実施した。

No.	イベント名	代表者		実 施 内 容
		学科	氏名	
9	浜松・中山間地域づくりシンポジウム 「まちむらリレーション市民交流 会議」	文化政策	船戸 修一	日時：12月14日(水) 13:00～16:30 会場：講堂、176講義室 主催：静岡文化芸術大学（共催）浜松市 内容：浜松・中山間地域づくりシンポジウム「まちむらリレーション市民交流会議」を開催し、本学学生がこれまで行ってきた取り組みを市民の前で発表し、大学・大学生・若者による中山間地域の再生の可能性を示した。当日は、浜松市長も来場しただけでなく、平日の日中にも関わらず、市民の参加者が200名を超え、浜松市における中山間地域づくりへの関心が高いことが分かった。また、地元新聞社に取り上げられるなど、地域の公立大学としての役割や地域貢献活動を十分にアピールできた。
10	静岡 Global Student Forum	国際文化	Jack Ryan	日時：3月4日(土) 会場：静岡文化芸術大学 281中講義室 内容：SUACまたは地域の大学生と高校生のグローバル意識を高めることを目的に、同時に国際問題への理解と、英語を使ったコミュニケーション能力と交渉スキルの向上を図った。 今回は「気候変動」をテーマに、各参加者は自分に与えられた代表国について事前リサーチし、それを元にグループに分かれて発表を行った。 「気候変動」への知識と英語のコミュニケーションスキルの向上が図れた。
11	イブニングレクチャー2016	デザイン	中野 民雄	浜松発のデザインムーブメントの発信、大学のプレゼンスのアピール、市民と学生の交流をクリエイトし就職などにつなげることを目的に業界のトップランナーを講師に迎えて、「イブニングレクチャー2016」を実施した。 会場：176講義室 主催：静岡文化芸術大学 【イブニングレクチャー2016 秋】 実施日時：10月14日(金) 18:30～20:00 会場：278講義室 講 師：Lapo Lani（ラーポ ラーニ）（建築家・アートディレクター） 【イブニングレクチャー2017 新春】 実施日時：1月24日(火) 18:30～20:00 会場：176講義室 講 師：落合 陽一（メディアアーティスト・筑波大学助教・実業家） 【イブニングレクチャー2017 春】 実施日時：2月4日(土) 16:00～17:30 会場：176講義室 講 師：佐藤 卓（グラフィックデザイナー）
12	TDW東京デザイナーズウィーク 2016 学生展	デザイン	中山 定雄	日時：10月26日(水)から11月7日(月) 会場：東京 神宮外苑 内容：アジア最大規模のデザインのイベントである。30年以上の歴史があり、本学は6年目の参加である。毎年、10万人を超える来場者もあり、国内外50校程度の参加校のなかで学生が大学の看板を背負い出展する。今回の作品は約5Mほどあり、両端についたハンドルを回すことで無数の羽状の板が波を表現する大作を出展した。この制作には1年生から3年生の計27人が7月から9月の約3ヶ月間夏季休暇返上で毎日、ミーティングを行い、素材から動き、形まで細部にわたり試行錯誤したうえで完成したものである。結果、本学においても初となる総合1位である「東京アワードグランプリ」を受賞した。
13	シンポジウム 「フェアトレードとエシカル消費 は社会を変えられるか」	国際文化	下澤 嶽	日時：12月10日(土) 13:30～18:00 会場：アクティビティ浜松コンgresセンター 地元のフェアトレードグループである「はままつフェアトレードタウン・ネットワーク」と共同で実施した。当日は、消費者の立場、経営者の立場、学術的な関心をもった人など多様な参加となった。2015年度に行ったイギリスと国内のフェアトレード調査の報告を行った上で、経験者による「すいーとまむの15年から学ぶ」「未来型農業のいかり農園」「カフェ立ち上げ物語を聞く」「海外の現場で商品を生みす」といった4つのテーマのセッションを設けた。
14	静岡ホスピタルアートプロジェクト	芸術文化	高島知佐子	アートやデザインを用いて無機質な病院や福祉施設の療養環境を改善し、患者・職員双方の心的ストレスを軽減すること、また、高齢者社会において誰もが無関係ではいられない病院のあり方を考え、地域に開かれた場所とすることを目的に病院で芸術活動を行う。 【浜松労災病院での活動】平成28年1月から12月 ・エスカレーターホール 卒業生の協力を得て、軽く安全かつ地域性のある布（注染）を用い、院内1階から2階へ向かうエスカレーター周辺の空間を明るく楽しめる空間にした。 ・図書スペース 小児科隣の図書スペースを快適に利用できるようリノベーション 【駿府博物館・静岡県立こども病院】 上記施設が進めているセラピードッグに関する展示会、イベントの企画運営に参加し、イベントを開催。またセラピードッグ以外にも引き続き連携し事業を進める。

No.	イベント名	代表者		実施内容
		学科	氏名	
15	メディアデザイン ウィーク2016	デザイン	的場ひろし	<p>大学間交流と相互啓発や地域社会への成果発信、文化振興などを目的とする成果発表イベント</p> <p>【学生展示】 日時：2月3日(金)～2月7日(火) 12:00～16:30 会場：西ギャラリー</p> <p>【講演会】※講演会は、全て280講義室を会場として実施 講演1「グルーヴィジョンズの仕事」 日時：2月3日(金) 16:30～20:30 概要：「グルーヴィジョンズ」代表の伊藤弘氏が、これまでの様々な作品や、デザインの手法・戦略等について講演した。</p> <p>講演2「デザインで、ご飯を食べるということ」 日時：2月4日(土) 16:00～18:00 概要：商品開発、商品デザイン、シンボルマーク、テレビ番組のアートディレクション・総合指導等、多岐にわたるデザイン活動が続けるグラフィックデザイナーの佐藤卓講師が、デザインの考え方について講演した。</p> <p>講演3「ランドスケープのかたち」 日時：2月6日(月) 18:30～20:30 概要：建築とランドスケープを学び、現在はランドスケープデザイン分野の第一人者として活躍する三谷徹氏はこれまでに手がけられた作品や、横文彦氏をはじめとする多くの建築家とのコラボレーションについて講演した。</p> <p>講演4「ジャズと創造性」 日時：2月7日(火) 18:30～20:30 概要：70年代から、ジャズトロンボーン奏者の第一人者として演奏・作曲活動続け、国内外の多くのミュージシャンと共演してきた向井滋春氏がジャズの世界を実演を交えて分かりやすく講演した。</p> <p>【「スケッチング」ワークショップ】 日時：2月4日(土) 13:00～19:00 会場：マルチメディア室・他 概要：メディア、デザインの領域で注目されている「スケッチング」(物理コンピューティング)をテーマとしたワークショップの開催</p> <p>【追加講演「アイデアとクリエイションで突破するコンテンツビジネス」】 日時：2月6日(月) 14:40～16:10 会場：280講義室 講師：大橋 隆昭 (DLEクリエイティブディレクター／プロデューサー) 概要：独特のアニメーションやキャラクタービジネスを展開するDLEの大橋隆昭氏が「コンテンツビジネスを成功に導くメディア戦略」「キャラクタを用いた広告のキーとなるアイデアとクリエイション」「お金を払いたくなるデザイナー・クリエイション」等について講演した。</p>

〈地域貢献・連携事業〉

No.	イベント名	実施内容 (実績報告書)
1	第16回 特別公開講座「ローソク能」 2016年10月5日～6日	第一夜 能講座 西田かほる (国際文化学科) 第二夜 ローソク能「三輪」 仕手：梅若猶彦 (芸術文化学科)
2	前期公開講座 「リオデジャネイロ大会から東京大会へ」 (2016年7月9日～23日・全3回)	第1回「リオデジャネイロ大会とブラジル事情」(伊シカワ・エウニセ・アケミ/国際文化学科)、第2回「オリンピック・パラリンピックの過去→2020年TOKYO→未来」(玉木正之/スポーツ評論家・本学客員教授、溝口紀子/国際文化学科)、第3回「オリンピック・パラリンピックの文化プログラムと今後の文化政策」(片山泰輔/芸術文化学科)
3	後期公開講座 「国際文化都市としてのパリ」 (2016年10月8日～29日・全4回)	第1回「絵画と外国人芸術家」(立入正之/芸術文化学科)、第2回「パリ国際大学都市の経緯と現状」(松本茂章/芸術文化学科)、第3回「モードの都の誕生」(永井敦子/国際文化学科)、第4回「エスニックシティ・パリ」(石川清子/国際文化学科)
4	夏季手作り公開工房 (2016年8月27日～28日)	①石膏デッサンを描いてみよう (山本一樹/デザイン学科)、②銅版画を制作しよう (佐藤聖徳/デザイン学科)、③テキスタイル 手織りに挑戦! (種村興治・桑原壽子/外部招聘)
5	春季手作り公開工房 (2017年3月18日～19日)	①石膏デッサンを描いてみよう (山本一樹/デザイン学科)、②銅版画を制作しよう (佐藤聖徳/デザイン学科)、③テキスタイル 手織りに挑戦! (種村興治・桑原壽子/外部招聘)、④ツールペイントを楽しもう (伊豆里美/外部招聘)
6	文化芸術セミナー「美術と音楽の西洋史」 (2016年10月26日、11月9日、11月16日)	第1回「ロマン主義・ロマン派」(石井園子/ピアノ)、第2回「印象派・印象主義」(原田麻里/ピアノ)、第3回「現代美術・現代音楽」(大井浩明/ピアノ)、立入正之/芸術文化学科、上山典子/芸術文化学科
7	文化芸術セミナー「楽器の事典」 (2016年11月24日、12月8日)	菊本和昭/トランペット、新居由佳梨/ピアノ、セミナー第1章「トランペットとは?」(松隈義彦/ヤマハ株)、第2章「トランペットの現在と未来」(福田徳久/ヤマハ株)

〈本学における学会開催〉

	名 称	本学担当者
1	日本文化政策学会 第10回年次研究大会	片山泰輔 (芸術文化学科)

■第17回特別公開講座「薪能 天鼓」

第一夜 能講座 10月4日(水) 18時30分開演(開場18時)

会場 静岡文化芸術大学・講堂

「天鼓の典故探し方」講師 明木茂夫(中京大学教授)

※学生による能「天鼓」のストーリー紹介もあります。

受講料無料(全席自由)

第二夜 薪能 10月5日(木) 18時開演(開場17時)

会場 静岡文化芸術大学・出会いの広場 ※雨天の場合は講堂にて開催

新作狂言「鈴虫」／井上松次郎 ほか

能「天鼓」／泉雅一郎 梅若長左衛門ほか

受講料 3,000円(全席自由 高校生以下・本学学生無料)

※チケットはアクトシティ浜松チケットセンター、チケットぴあ、サークルK・サンクス、セブンイレブン、ファミリーマートにて購入できます。

■現代劇 喫茶店

第4回 静岡文化芸術大学×SPAC-静岡県舞台芸術センター連携事業

テーマ「時空間の問題」

作・演出 梅若猶彦(芸術文化学科)

出演 三島景太 片岡佐知子 関根淳子 真嶋陽(芸術文化学科3年)

日時 10月9日(月・祝)

現代劇 14時開演(開場13時30分)

シンポジウム「現代劇の時空の問題」(15時30分開始)

■静岡文化芸術大学の室内楽演奏会2017

○「北海道アイヌの自然への思い 今を生きるウタリの歌声」レクチャー&コンサート

出演 千葉伸彦(レクチャー・演奏) 恵原誌乃(演奏)

日時 11月18日(土) 14時開演(開場13時30分)

会場 静岡文化芸術大学・自由創造工房

○「ラップの変態」(仮称) (本紙p.5参照)

出演 浜松・諏訪のラップ演奏者

解説 奥中康人(芸術文化学科)

日時 12月9日(土) 17時開演(予定)

会場 静岡文化芸術大学・自由創造工房

※「アイヌ」「ラップ」共に入場無料・要申込(mail: acrc@suac.ac.jp fax: 053-457-6123)

申込の際、氏名(フリガナ)、参加人数、電話番号、住所をご連絡下さい。

大学主催のイベント、シンポジウム、セミナー等は静岡文化芸術大学のホームページでも順次情報公開されています。

<http://www.suac.ac.jp/>

編集後記

今夏、大学近隣の会場で「百貨店松菱と中心市街地回顧展」と題する展示を観る機会がありました。1937年(昭和12年)開業の「松菱」は営業が続いていれば今年開業80周年、浜松初の本格的百貨店は浜松市美術館が開館(1971年)するまで「文化の殿堂」でもあり、市展が松菱の催事場で開催された記録もあります。大食堂には東郷青児画伯の大型絵画。写真でみる「賑わう百貨店」は当時の市民にとって確かに「文化の香りいっぱい」のワクワクする空間だったに違いありません。突然の経営破綻(2001年11月)から16年、今尚更地のままの「松菱跡地」は最近では浜松都心のランドスケープとして、馴染みつつあるようにも感じます。SUACの教員や学生が開学以来取り組んできた中心市街地の問題。回顧展に見入りながらも「当分は更地のままというのもあり？」という妙な納得感すら漂う、まさかそんなことはないと思いますが…(St.)

Art & Culture

文化・芸術研究センター
Vol.26

文化・芸術研究センター
ニュースレター

September 2017

発行人: 峯郁郎 編集人: 富田晋司
発行: 静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
(事務局 静岡文化芸術大学 地域連携室)

